

愛されすぎて仕事が出来ない

最高のモルモット

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もしも藤堯キチがS・O・N・Gに居たら。もしも原作キャラにも愛されていたら。こうなればいいなって話。

更新ペースは気分です

# 目次

|                    |    |
|--------------------|----|
| 序章                 | 1  |
| 惨事                 | 5  |
| 俺の島じゃノーカンだから       | 10 |
| 疑心                 | 15 |
| バーニングサヨ            | 20 |
| BADENDは突然に         | 24 |
| ふじマリはいいぞ           | 32 |
| 覚醒                 | 36 |
| 黄鬼                 | 40 |
| 唐突な自分語りは基本         | 45 |
| 仲間が増えるよ！やったねさくちゃん！ | 49 |

## 序章

日本は良いところだ。世界一住みやすい気候、世界一美しい環境、そして国民に宿る大和魂。どれをとっても、世界と引けを取らない。そこに住んでいる俺に、この世界に対する文句は無いと言えよう。

ただ一つ、あるとすれば――

「…あの、今仕事中…。」

「いいじゃないですか藤堯さん。…あつたかーい…。」

近い近い。やめてくださいそれは俺に効く。ちよつとそこやめてくすぐった

——こうやって現実逃避している間も、時間は止まってはくれない  
と言うことだ。

紫葉シバ小夜サヨちゃん。

彼女はついこの間、『シンフォギアに適合しますた』というレスを、  
7ちゃんねるにあげていた。当然大騒ぎになって、彼女を保護する事  
に。

その情報は嘘ではなく、見たことの無いシンフォギアを持つてい  
た。名前は長いから省略するが、紫色のギアだった。…シエンシヨウ  
ジンと被つてんじやねえか。

で、なんか俺に懐いた。

…かなりマイルドな表現をしてしまった。…5?の激苦コーヒー  
に、シロップ5ℓ突っ込んだ程度のマイルドさだ。——あ、これただ  
の甘味の暴力だわ。殺人兵器だわ。

『よろしくです！藤堯さんッ！』

『…あ、ああ。よろしくね。』

こんなこと言ったのが間違いだった。いやわかんねえよ。何でこ  
れがバッドコミュニケーションなんだよ。俺はノーマルで良かった

んだよ。しかも挨拶でバッドエンド直行ってどんなクソゲー？

「どーしたんですかあ？お仕事、しないんですか？」

「…いや、画面見えないから。ちよつとのけて、ね？」

チキンな俺は、女性の怖さをよく知っている（友里さんとか友里さんとか）。なので、なるべく刺激しないように心がける。

「…むー。いけず。」

「……………。はいはい。友里さんに相手して貰ってね。」

実はこの子、中学生である。——正確には、”年齢的には”だ。シンフォギアを『拾った』らしい彼女は、それから学校に通わなくなつたそうだ。

「はーい。…後でちゃんと相手して下さいね？童貞さん。」

「……………」

何も言い返せない。それがまた悔しくて、涙が出そうになる。やめろよホントにお前なあおい（語彙力）

とととて走るその姿は、普通の女の子のようだ。——二人きりになると、獣になるんですけどね初見さん。

…見ろよ。あの友里さんと話している小夜ちゃんの顔を。めっちゃ露骨だろ？見てて胃が痛くなる。

まあ、何が言いたいかつて言うと、俺は彼女の事を『やべーやつ』として認識している。それを知らせているのは、長い付き合いの友里さん、緒川さんだけだ。…司令？アホか。余計な心配掛けさせられねえよ。

独り言では強気な俺は、再びディスプレイに向き直る。——そして、目を見開いた。

『見すぎ。——by友里』

…アツハイ。すんません、仕事します。

◇？

「…んー。今日はこの辺にしとくかな。」

「——藤堯さんッ！今日は皆でご飯食べに行きませんかッ!？」

この元気でちよつと抜けたようなこの声は、響ちゃんか。…やつべ眠た。目が殆ど開かない。

「…だ、大丈夫ですか？」

「…う、うん。平気平気。…ところで、なんて言った？」

多分寝ぼけているのだろう。俺を食事に誘ったように聞こえたんだが。まさかこの彼女いない歴は年齢と同じな俺を誘うわけ――

「――ですから、…ご飯行きませんか？」

「……………」

「いいよ」

熟考した。まあ殆ど『深読みダメ絶対』↓『いやもしかしたら…』↓『最初に戻る』のループだったけど。しかも声ちつき。恥ずかしつ。

俺が中学生みたいなのをしていると、響ちゃんが笑った。

「…何？」

「あ、すいません…面白くてつい。…藤堯さんって、もつと大人な人かと思つてました。」

何を言うか。俺は立派な大人だぞ。現にこうやって給料泥棒をしている最中だろう。意地汚いところとか、人に押し付ける所とか特に大人っぽいだろ。…やつべ泣きそう。俺自虐キャラとか向いてねえわ。

「…どうして俺が大人じゃないって証拠だよ。」

言いたいことを詰め込みすぎて、文法など皆無だが、どうにか言葉にする。それを何となく察した響ちゃんは、正直に答えた。

「だって、小夜ちゃんと話してる時も、まるでぼつちが陽キャ女子高生に話しかけられた時に似てますし。」

その通りだよ。何の狂いも無く大正解だよ。あと響さん。陽キヤなのはあんたでもでしょうが。わかつててやってるんですかね。

「私と話す時も、目を見てくれないし。…あ、でも気持ちすごいわかりますよ?。」

「……………そ、そう?。」

お前に何が分かるんだ。そうは言えなかった。

響ちゃんの暗い過去は、あの父親の下りで大体わかる。この子も大変だったろう。にも関わらず、俺はこの子に戦いを押し付けた。…自分が何も出来ないのを棚に上げて、生意気に命令とかも出した。あー死にて。

「…ほら。今も自分を責めてる。」

「…げっ。」

何故バレたし。もしかしてエスパーなの？てつきりかくとうタイプかと思ってたのに。どっちも不遇タイプだけど。

—————。

「…あ、皆が待ってるんだったッ！…ふ、藤堯さんも、”来れたら”この紙に書いてるとこに来てくださいねッ！」

「わ、わかった。」

紙を渡し、響ちゃんは急いで出ていった。話を打ち切った理由は、多分アレだろう。うん。見たくないし、口にも出したくないけど、一応確認を——

「——死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬアイツ本当にいい加減にしろよマジで殺す絶対殺す殺す殺す」

「……………たすけて。」

血走った眼で、さつきまで響ちゃんがいた場所を睨み、今にも俺を襲いそうだ。…それを、友里さんが必死に抑えていた。

もうやめて。友里さんのライフはもうゼロよ。このままでは、俺の心がバーニングディバイドしちゃうんだが。

393こえー…。

友里さんを助けてたら、結局ご飯には行けなかった。…ちくしよ

## 惨事

あー眠たい。…何で俺が中学生のお守りをしないといけないんだ。

「浮気者は許さないです。」

「すみませんでした。」

なんでもないです。ハイ。…怖いよこの子。

友里さんを帰らせた直後、小夜ちゃんは突然抱きついてきた。異常な程呼吸繰り返しながら。吐息とがちよつと色つぽいし。守備範囲じゃないけど俺に効くよ？

で、司令が入ってきた。見られても別に困らないんだけど——

「お前、そんな趣味が…。——す、すまんツ！邪魔したなツ！」

なんて言いながらダツシユされれば、誰だって追いかけるもの。だが、それは無理だった。ちよつと考えればわかる事だ。

「逃げちややだよ…。」

はん。今度は泣き落としか。そんなの俺に通用するますはい。普通に通用しました。いや、だって無理でしょ？こんなの卑怯だよ。

その後、正座させられた。こちとらまだ寝てないってのに。そして、冒頭のセリフである。…ヒトヲオチヨクツテルトブツトバスゾ！「…まだ分からないんですね。…藤堯さんは私の物なの。だから、勝手にフラフラしたら…めっ、ですよ？」

めっのところ『滅ッ』に聞こえたんですけど。多分暗殺教室の読みすぎじゃないよね。

「…返事が聞こえないなあ。」

「——あだだだッ！わ、わかったからッ！分かりましたッ！」  
腿を踏まれ、絶叫する。…もうやだ。

◇？

「——なんて事があつたんですよッ！どう思いますかッ！うわああああッ！」



「…心中お察しします。」

なんやかんやで逃げ出し、緒川さんに泣きついてきたという訳だ。我ながら情けないが、どうしようもないのだ。

今、緒川さんの部屋にいる…筈なのだが、異様に部屋が汚い。

「ところで、これどうしたんですか？」

「……………先程まで翼さんが居た、とだけ言っておきます。」

全て理解した。ここまでの意思疎通が出来るなんて、統一言語なんていないんじゃないかな。

「あれ？何で翼さんが居たんですか？」

ハツとなり、気付く。まさか、2人はそんな関係に——つて、アホか。中学生じゃないんだから、憶測でものを言うのは良くない。

「…お答えしかねます。」

その目には心配と、慈愛があつた。何だ、何があつたんだ。聞くのが怖い、聞くしかないだろう。

「他言はしません。」

「別に他言無用という訳ではありませんが……………貴方が良いなら、いいんでしょう。」

含みのある言い方に、少しムツとしてしまう。それでも俺は大人だし、どんな事を言われても受け入れる覚悟は出来ているつもりだ。

そして、緒川さんは重い口を開き——

「——貴方を探していたんですよ。藤堯さん。」

「…は？」

何事だよ。

◇？

落ち着いてきたので、話を整理しよう。睡眠も緒川さんの部屋で取らせてもらったし、バッチリだ。いやまあ、流石に迷惑かと思っただけだ。

『友人に僕が出来ることは、これぐらいですから。』

すつごくいい人。女に生まれてたら間違いなく緒川さんを選ぶよ。あつちが選んでくれるか知らないけど。

まずひとつ。装者の人達が俺を探してらっしやる。俺ずっと仕事してたのに。用があるなら話しかけてくれればいいのに。

だが、そうは思わなかった。緒川さん情報だと、『迷惑は掛けたくない』だそうだ。全く、小夜ちゃんも見習って欲しいものだ。まだ子供とはいえ、度が過ぎることも稀によくある。

そしてもう一つ。これは今明かされる衝撃の真実なのだが、このまじや友里さんがやばい。何がやばいって知らん。俺は何も知らん。緒川さんも言葉を濁すばかりだ。

昨日の事をよく考えると、友里さんはかなり参っているようだ。小夜ちゃんの世話を俺に押し付けられ、ただでさえ自分の仕事で精一杯だと言うのに俺は…。人間のクズがこの野郎…。

という訳で、友里さんを探す。しかしここは広い。探すのには一苦労だ。…かと言って電話はハードル高い。

ひたすらに廊下を走るが、デスクワークしかしてない俺には体力が絶望的に無い。ひとまず休憩を――

「――あ、藤堯さん。」

「ツ!?ゲホッ!ゲホッ!…し、調ちゃんか…。」

曲がり角で止まったのが間違いだった。心臓に深刻なダメージくらい、息絶え絶えになる俺に、調ちゃんは不安げに声を掛ける。

「大丈夫?」

「あ、う、うん。大丈夫だよ…。」

こんな顔面蒼白な男に言われても、まるで説得力が無い。すると、調ちゃんは後ろを向き――しゃがんだ。

「…おぶさって。医務室に連れていく。」

「ちよとしよれはシャレにならんですよ。」

噛んだし。何言ってるかわかんないし。恥ずかしさで一杯になる。が、おぶさってしまえばとんでもなく酷い絵面の完成だ。ピカソもびつくりだよ。

「どうして?…あ、マリア。」

「あら、調…と、藤堯。どうしたの?」

呼び捨て☆…別にいいけども。いや待って。マリアさんもダメだぞ調ちゃん。そんなことしたら俺刺されるから。

「藤堯さんが体調悪いから、マリアにおぶさりたいたって。」  
俺終わった。

「…な、は、えツ!?!…いい、いいけど…。医務室、よね?」

いいのかよ。

…い、いやいや待って待って。こんなのおかしいから。待ってって言うてるでしょ流行らせコラやだ髪めっちゃいい匂い。

「…何をそんなに慌てるのよ。…おぶさりたいたって言ったのは貴方なのに。」

「…言っていないです。」

言っていないけど、このシチュエーションは中々…って、俺は変態か。すると、目の前のマリアさんの首が真っ赤になって行く。

「…え?どういうこと?」

「…ごめんねマリア。あれは嘘だよ。…本気にすると思わなくて…。ほら、調ちゃんも謝ってるし、許してあげ——」

「——うわあああああああッ!ばかあああああッ!」

「——うごッ!」

あまりの大音量に面食らって、仰け反り、頭を打つ。…さ、流石トツプアーティスト…。

「ああッ!だ、大丈夫ツ!」

「…う、うっす。」

「落ち着いてマリア。まずは人工呼吸を…。」

お前が落ち着け。ちよつと、待って。誰か助けて。頭痛い。動けな

「——ウワアアアアッ!」

情けない声を上げながら、初めてを奪われるのであった。

俺の島じゃノーカンだから

いやーいい夢見れも…いや、酷い目に遭った…。まさか花の女子高生に人工呼吸されるとは。

元氣を取り戻した俺は、何気にスタンバっていたマリアさんを宥め、走り出した。

——が、足元を捕まれて転ぶ。

「——おぐツ!?!」

顔を強打する。暫く悶絶していると、マリアさんが怒る声が聞こえた。

「な、何やってるの貴方ツ！やめなさいツ！」

え？

「許さない。よくも」私の「藤堯さんを。」

このセリフで、誰が何をしているのか全て把握した俺は、すぐさま立ち上がり——逃走するか迷った。

ここで逃げれば、二度と歯向かえなくどころか、人間として、男としてクズだろう。

だが、プライドや他人の評価より、自分の命の方が大切だ。だから、この迷いが生まれた。

——それは野生の中では、致命的な隙なのだが。

「——たすけて」

振り向くのが怖い。調ちゃんの助けを求める声がする。…ちくしょう。何で小夜ちゃんは暴力とか振るうかね…。

「コラー！何暴→力←してるツ！中学生はそんなことしか考えないのか（偏見）」

言いつらいことは語録の力を借りる。割と小さい頃からこれやってるけど超便利。

尚、振り向けてはいない模様。…後ろでどんな顔してるのか、わかりやしない。

「…えー？酷いなあ。私は暴力なんて振るってませんよ。」

マジかよ。…もしかして、実はいい子——

バチリと音が聞こえた。…痛え。これはもしかやスタンガン…。

ああ、そうか。道理でマリアさんや調ちゃんや静かだと思った。…  
何故音が聞こえなかったし。

◇？

「起きましたかあ？」

「…起きてない。」

「あはっ。それギャグですか？つまんないですよお？」

やってらんねえ。前見えないし、金属の擦れ合う音が聞こえるし。  
背中冷たいし。間違いなく監禁されてますねこれは。

「これから貴方には教育を受けてもらいます！」

「いやです」

「じゃあまずは1時間目ですなー！」

聞いちやいない。…すぐさま刺されなかっただけマシか。

一先ず、助けを待とう。非力なオレではこの手錠を解くことは出来ない。かと言って力づくで小夜ちゃんに襲いかかろうとも、多分勝てない。地のパワーで負けてる。

「じゃあー…。『耐久力』の抜き打ちテストね！」

——腹部に強烈な激痛が走る。

「——ヴォエッ！」

喉から込み上げるモノを、惜しげも無くぶちまける。酸っぱい臭いが辺り一面に広がる。…な、なんてことをするんだ。

「…アイツの菌を、全部吐き出さないと…ねッ！」

「…ゴエッ！…あ、あ…。」

何だこの子。殺す気か。その脚ならサッカー日本代表も夢じゃない  
——また蹴られる。

「…あは。いい声してますねえ！道理でねえ！」

「…う、うぐ…。お、俺が何をしたんだ…。」

いい大人が、少女に痛めつけられて、涙を流す。これ程の屈辱があ

るだろうか。そんな思いから、この眩きが零れた。

「…まだ、分からないんですか。貴方が、私以外の女の子と話すのが悪いんです。私の所有物を、勝手に奪おうとしたアイツらが悪いんですよ。何でそんな顔をしてるんですか？私の愛を受け入れられないんですか？ねえ。ねえ？——答えてよ。」

待つて、言いながら蹴らないで。これじゃ声も出せない。…しかし、俺が悪い、か。理不尽だな、世の中って。

俺はただ、皆に平等であろうとしただけなのに。誰かを優遇することもなく、卑下することも無く、心から分かり合える人など一人もない。緒川さんはいい人だけど、やっぱり何処か距離を感じる。

——俺はただ、平穩に生きて死にたいだけだ。

「…そう。答える気は無いんですね。——なら、その口塞いじやいましょうか。…あ、腕も私が介護するから要らないですね。足も、目も、鼻も耳も全部もいで。逃げられないようにしましょう。…はは、何だか楽しくなってきた。」

現実世界に意識が戻ってくる。これはまずい。小夜ちゃんは正気じゃないぞ。…俺が何か言わないと。

「ま、待、っ、て。」

喉潰れてんのか俺は。…無理だな。

「…うッ！」

小夜ちゃんの呻き声が聞こえる。この風を切る音は、もしかして—

「——大丈夫ですかッ!?…心配だったので、着いてきて正解でしたね…。」

「…お、おがわしゃん…ッ！」

泣いた。全俺が泣いた。

◇？

拘束を解いてもらい、医務室に運ばれる俺。

「…すみません。遅くなってしまうて。…閉めた瞬間にロックが掛か

る仕組みだったので、手こずってしまいました。」

「…うう、いいんですよ…ッ！ありがとうございます…ッ！」

涙無しでは、感謝は出来ない。もう緒川さんに足を向けて寝られないなこれ。

「…そ、そういえば小夜ちゃんは…？」

それが気がかりだった。恐らく緒川さんはATEMIで気絶させたのだろうが、まだあの部屋にいるのだろうか。

「あの子なら、既に他の職員方に任せています。…それより、傷は大丈夫ですか？」

「え、あ、はい。…まだ痛みはあるんですけど、大分マシになりました。」

本当は滅茶苦茶痛いし、今も意識を失いそうな程だ。…これ肋骨何本か折れてんじゃないのか。

だが、緒川さんを心配させる訳にはいかないし、友里さんを探さないといけないのだ。

「…そうですか。ですが、今日は休んだ方が良いでしょう。」

「…いや、本当に大丈夫——」

「——今日は、休んだ方が良いでしょう。」

「……………はい。」

怖い。緒川さん怒ると怖い。…気をつけよ。

すると、ノックの音が聞こえた。

「風鳴翼です。…緒川さん、何かあったのでしょうか？入ってもよろしいですか？」

翼さんか…びっくりした…。てっきりまた小夜ちゃんかと…。――

―そこで、チラリと緒川さんを伺う。

「……………」

彼の目の奥に、黒い物が走った気がした。…どっかで見たけど、思いつかない。

「——緒川さん？」

「…翼さん。大丈夫ですから。」

え？入れてあげないの？



「——え、でも。」

「任務で掠っただけです。心配することはありませんよ。」

翼さんは、純粹に緒川さんが心配なだけだろう。だが、緒川さんは心底鬱陶しそうな顔をしている。それを察した翼さんは、

「……わかり、ました……。」

——藤堯さんが、そこにいるんですね？」

何故バレたし。ドアをこじ開けようとする翼さん。ガタガタと音を立て、開きそうになるドアを、俺は呆然と眺めていた。

…何が始まるんです？

## 疑心

緒川さんの様子がおかしい。今気付いたんだが、彼が翼さんの事を放置するとは到底思えない。これは二人の間に何かあったに違いない。

「緒川さんッ！いい加減にしてくださいッ！流石の私も韃走らずにはいられませんよッ！」

「…翼さん。あなたには関係の無い事です。」

全く状況が飲み込めない。え、何これは。もしかして修羅場？マジで何があったの。

「——藤堯さんの事は諦めてくださいッ！貴方は男性でしょうッ！」  
はあ？

◇？

俺氏、逃走中。

窓をがち割り——嘘です。普通に開けました。——部屋から脱出する。緒川さんは翼さんに気を取られていたらしく、俺を捉えることは出来なかった。

しかし、この逃走劇も時間の問題だろう。俺は元々体力がないし、死ぬ寸前まで追い詰められたのだ。保ってあと10秒弱。…明日から非番の日も運動しよ。

——走る、走る。ひたすらに走る。

そして、眼前に黒い影が現れ——驚き、止まる。その黒い影は俺を捕まえ、近くの部屋に引き摺り込んだ。

「…な、何をッ!？」

「しッ！…大丈夫。心配しないでください。…これは翼さんの作戦です。」

翼さんの作戦？

黒い影の正体、小日向未来から話を聞く限りだと、翼さんが緒川さ

んがおかしい事に気づいたのはつい最近であり、様子を窺っていたらしい。

結果がアレである。…いや、本当に助かった。緒川さんに襲われたら拒否できない。(命の危機的な意味で)…俺がノンケでよかった。

「…あ、その、もう怒ってないの?」

「え?」

未来ちゃんは以前、響ちゃんに誘われた俺に殺意を向けてきてやばかった。…今はどうなんだろう。ひよつとしたら、俺をここでSHI☆MA☆TUする気なのでは?

「いや、あれは、その。…下らない嫉妬ですよ。…私のことは誘ってくれなかったから。」

それはあれか。『未来は確定でー、後は誰誘おつかなー』的なあれか。仲睦まじくていいなあ。

「…結局俺は行ってないけどね。」

「…あ、な、なら今度こそ行きませんかツ!」

2回目だが、耳を疑った。俺の耳もとうとう限界か。…聞き直すまでもなく幻聴だから無言を貫く。

「…あ、いえ。お気に障ったなら、すみません…。」

何だこの乙女。これがあの393かよ。ギャップ萌えが有頂天だよ。だが、理性を保つ。ここで手を出せば小夜ちゃん乱入とかいうオチなのは分かりきっている。

…そういえば、マリアさんや調ちゃんは大丈夫なんだろうか。バタバタしすぎて気付かなかったけど。俺マジでクズ。

「…ごめんなさい。忘れてください。…都合良すぎますよね。」

「…えっ。あ、是非行かせてもらいたいですけど。」

しまった。答えるのを忘れていた。未来ちゃんが涙目でとても心が痛んだ。そのせいで、脊髓反射で言葉を放つ。

「ほ、本当ですかツ!」

「…う、うん。…あ、でも高すぎるのは勘弁してね。」

ここは俺が払わないといけないパターンだと、俺の第六感が言っている。——あと一つ、第六感がなんか言ってた気がするけど、多分気

の所為だろう。

「…いい、いいですよッ！…私が払いますからッ！」

「…いや、俺が払うよ。大体さつき俺がゴネたのが悪いんだしね。」

「いや、でも。」

「いや、だから。」

…言い合いになる。今更だが、未来ちゃんとかんなに話すのは初めてだ。ぶっちゃけ響ちゃん大好きのやべーやつとして見ていたけど、良く考えればこの子もまだ高校生なんだ。

…人の裏面は見るのは怖い。だが、意外なところが見られる。当たり前前のように、よく分かっていることだった。

「…ふふふ、あはははっ。」

「…くっ。…あはははっ！」

何故か笑いが込み上げる。さつきまで泣きそうだったのが、嘘のようだ。

「わかりました。…お願いします。」

「…うん。じゃあ、店選びは任せるよ。」

――。

「――心外ですね。僕がこの程度で撒けると？」

「――ウワアアアアアッ!？」

びつくりしすぎて叫び声にすらビブラートが着く。

「…小夜さんの気持ち、少しわかりました。…貴方のこんな新しい表情を見られるなら、僕も同じ事をすれば良かったですね。…彼女は独り占めしたのが良くなかった。」

その表情はギラギラと、獲物を狙う獣の様だった。

――兎とライオン。それすら生ぬるい対比が、ここで出来上がっていた。

――しかし忘れてはいけない。時にライオンより恐ろしいものが存在することを。

「…そんなの、間違ってますよね。」

俺の服の裾を強く握り、未来ちゃんは呟く。…そんな時、第六感君のセリフを思い出した。

『何でお前がこの子に誘われてんだ』

そうだよ。この子が…勘違いかもしれないけど、浮気なんてするわけがない。これは異常事態だと考えるべきだった。

「——独り占めなんて、良くないですよねえ。」

「…なら、2人で分けましょうか。」

——兎とライオンと蛇ッ！

◇？

逃げるが勝ちと言うが、勝利条件を満たすにはまだ遠い。

廊下を逃げ惑う俺。…俺最近走りっぱなしだな。

やはり、皆が変だ。主に俺を見る目が。あの時は気付かなかったけど、響ちやんが未来ちゃんを誘わない訳がない。

小夜ちゃんにしてもそうだ。片鱗はあったけど、あそこまで酷くなかった。まるで、本で見た——

「——うッ！」

動けない。この術はまさか——

「——影縫い。これで逃げられませんね。…ああ、その怯える表情も中々良いですね…。」

やべえ。俺の憶測が正しければ、ここの人達は全員やべーやつと化している。何処へ逃げててもダメだ。…マリアさんは、まだ初期の段階だったんだろう（適当）。

「…や、め——」

「そこまでだ緒川。未来君。」

このダンディなOTONAの声は…。

「——司令……ッ！」

「……済まない。遅くなったな。——藤堯。」

司令——風鳴弦十郎が、緒川さんの前に立ちはだかった。

何故だろうか。俺には彼が救世主に見えない。

## バーニンググサヨ

「――司令。どうしてここに…?」

「…ん? ああ。発信k…嫌な予感がしてな。駆けつけたんだ。」

今聞こえちやいけない言葉が聞こえたんですがそれは。ボロ出るの早過ぎない?…根はやっぱり司令なんですな。

早くも展開を理解した俺は、逃げようとして止まる。…ここは、あつちがグダグダしてる隙に体力を回復させるべきだ。

「――という訳で、3人で分けましょう。」

「…早ッ! 和解するの早ッ!」

思わずツツコミを入れる。いや、さっきまでの険悪なムードは何処行つたよ。…あれ、待つて。どこに逃げてても安置なんて無くない? いや、目的を見失うな。…友里さんを見つけるのが第1条件だ。

その為に恥じらいを、ファーストキスを、胃の内容物を全て犠牲にして来たんだ。ここまで来て、諦める訳にはいかない。…とは言え、この人らを撒ける気がしない。

前のノリで言うならば、兎とライオンと蛇とキングベ〇ーモスだろう。

「…や、やめてくださいッ!」

影縫いで動けないんだった。忘れてた。…やばいやばい。死ぬる。俺の童貞が散らされる。

「――私の藤堯さんに何晒しとんじやワレエーッ!」

「――グッ!…いい突きだッ!」

さ、小夜ちゃんッ!? もう起きたのッ!?

司令が仰け反るとかどんなパンチだよ。そう言いたかったが、今がチャンスだ。…しかし、置いていっても良いのだろうか。

「だが甘いッ!…もつと腰を入れて打つべしッ!」

「危なッ!…何ボケつとしてるんですかッ! 早く逃げて下さいッ!」

神回避で司令のパンチをギリギリ躲し、俺にそう言った。…まさ

か、俺を助けるために…。

「――。」

「…ッ！聖詠ッ!？」

光に包まれ、消えた頃には――濃い紫のギアを纏った、小夜ちゃんが立っていた。

「――あああッ！」

「…あ、熱ッ！」

何て熱量だ。…これがこのギア――『イフリートウオ』の能力か。  
…何故紫なんだ（困惑）

「行つてッ！」

言われて気付く。影縫いを発揮させていた刃が、熱で溶けていることに。…ピンポイントで、この部分だけ燃やしていたらしい。じゃなかったら俺も溶けてる。

「…ドロップッ！ファイヤーッ！ジエミニッ！」

あ、これアカンやつ。

「…ッ！二人ともッ！離れろッ！」

「――バーニングウ！ディバイドオオッ！」

「――ザヨゴオオオッ！」

その攻撃の爆風で、俺はかなりの距離吹き飛ばされる。…小夜ちゃん…それどつちかと言うと俺が言うセリフだから…。名前に。

このまま壁に激突すれば、俺はただでは済まないだろう。…どうしたもののか。

◇？

…あーしんど。熱は…39度か…。死ぬ。

今まで空気だった一人。雪音クリスは、家で療養していた。流行り風邪にかかってしまい、休暇を貰ったのだ。

「…腹も空かねえ。…ん。」

チャイムが鳴り響く。…こんな時に来客か。



重い体に鞭打ち、どうにかマスクを着けて、玄関に辿り着く。

「——クリス先輩ッ！お見舞いに来たデスよッ！」

そこ先には、今まで空気だった一人の暁切歌が。

「…って、大丈夫デスカッ!?顔がオールブルーデスよッ！」

「…大丈夫な訳あるか。今にもオーバーヒートで爆発しそっだよ。」

お互いに特徴的な話し方なので、傍から聞けば何を言っているのか分からないだろう。

「よーしッ！今日はあたしが看病するデスッ！」

「え、いや、いいから。」

とはいえ、1人は心細い気もしなくも無い。…それが分からない切歌では無く…。

「了解デースッ！まずはお粥から作るデスよッ！」

「…まあいつか。」

二人の間に流れる空気は、生ぬるかった。

◇？

一方地獄。——せめて煉獄あたりに留めて貰おうか。

普通に壁に激突した俺は、暫く気絶していた。…普通さ、こういうのって助からない？それにしても、飛んでいる最中にレーザーが飛んできたのはびびった。…393も本気出したのか…。

「——で、何で俺はミイラ男みたくなってるんですかね翼さん。」

「…私は本を見ながらやっただけですが。」

どんな本だよそれ。いっぺんにやろうとするからこうなる。…この人の不器用さは、日常生活にも影響があるのでは?…あつたわ。

…ここはまた医務室か。…前とは違う部屋のようなだが。

「…俺の容態は?」

「…えっと、左肩が複雑骨折。肋骨は3本折れて、背骨にヒビが。…あと脳震盪の疑いありで、出血。内蔵もかなり傷んでいます。…特に胃が。」

控えめに言って重症だよ。…ファンタジーのあふれるこの世界で、こんなリアルな怪我するか普通。

「…足が無事なら別にいいか。…よつと——」  
起き上がろうとするが、バランスを崩す。慌てて翼さんが支えてくれる。

「何をしているんですかッ!?…そんな身体で何処に行く気ですかッ！」

「……。」

正直に言うかどうか迷う。…彼女も今までと同じ様に、おかしくなっているかもしれない。…なら、直球で聞いてみるか。上手い作戦も、このザマじゃ思い付かないし。

「…俺の事どう思ってるんですか？」

「…う…大切な、守るべき仲間…と、私は思っていますが。」

あ、この人正気だ。眼にも例のアレが渦巻いてないし。…この人が嘘を吐けるとは思えない。

「…それだけ聞ければ十分です。じゃあ俺はもう——」

「——行かせませんよ。」

背筋に冷たい物が走る。…今までの流れと同じだからだ。…もう誰も信じらんねえよ。

「——そんな怪我。悪化したら目も当てられませんよ。…行くのなら、私も行きます。」

「…えっ？」

「肩を貸すくらい、仲間として出来て当然ですから。」

肩を貸して貰い、医務室を後にする。

【朗報】翼さんだけマトモだった。

## BADENDは突然に

「翼さん。」

「…あまり喋ると、傷が開きますよ。…とは言っても、塞がってすらいないので。」

ここそと、そしてとぼとぼ歩く2人組。1人は满身創痕の——ミイラ男。そしてソレに肩を貸しているにも関わらず、涼しい顔をしている美人——風鳴翼。

「…いや、この見た目どうにかありませんかね。マリアさんの時以上にとんでもない絵面なんですけど。」

「…？マリアがどうかしたんですか？…それより、まさか小日向が反旗を翻すとは…。彼女だけは安全だと思ったのですが。」

翼さんも、皆の様子に気付いていた様だ。…感染しないか、一抹の不安は残るが、返事をする。

「俺ですよ。…というか、緒川さんや司令にまで狙われるとか、これなんてエロg…おっと。」

危ない危ない。翼さんに不埒な言葉を教えてしまう所だった。翼さんは聞き返してくるが、なんでもないと返す。

「…不承不承ながら、聞き流しましょう。」

…司令や緒川さんのことは、残念でした。紫葉の犠牲のお陰で、貴方は生きています。…それを忘れないで下さい。」

「…分かってますよ。」

まあその本人のせいでの重症なんですけどね。

そして、とうとう辿り着く。——翼さんが匿ったと言う、友里さんがいる部屋に。

「…なんか、何年ぶりに来たような錯覚を覚えますよ。」

「…何があつたのかは大体分かりますが、そんなミイラ男みたいな顔しないでください。」

それアンタのせいやろ。

◇？

「あーん。」

「…あ、あーん。」

スプーンでお粥が口に運ばれる。控えめな味だが、十分だ。

「どうデスか?」

「…あーうん。普通にお粥。」

ぶつきらぼうに返すクリスマスだが、切歌はニヤニヤしている。

「…んだよ。」

「いえ、弱ったクリスマス先輩も可愛らしいと思つて（ry）」

殴つた。

◇?◇

「あれ?藤堯さんと…翼さん?」

——戦慄。 またこのパターンかという思いと、何をされるかわからない恐怖。しかし、翼さんは普通に応える

「ん?立花か。 ……!——どうしたのだ?」

「…え?あ、いや、見かけたもので…。」 2人で何してるんすか?」

俺は今、震えているんだろう。翼さんが俺を気遣う素振りを見せているからだ。…まさに『ゾツとする物をお見せしよう』をされている気分だ。

「…いや、そのだな…。」

こつち見ないで。確かにどんな言い訳も無理があるとは思うけども。俺重症だし、それを運んでいる理由も、この響ちゃんに本当のことを言う訳にはいかないし。

つまり、詰みである。…意を決して、響ちゃんの眼を確認すると——案の定である。直ぐに答えないことに苛立ったのか、黒い物が走つた。…あかんこれじゃ俺が死ぬう。

「——じ、実はね。これから仮装の練習をするんだッ!」

「…へ?」

「…な、え?——あ、ああ。そうなんだよ。」

翼さん。何言つてくれてんのかみたいな顔しないで。もうこれしか

無いでしょ。…ハロウインはちよつと遠いけど。

「…成程ッ！そういうことですかッ！——つてなる訳無いですよね。」  
デスヨネー。まあ分かった。というかいきなり無表情になるのやめて。怖いからさ。

「…た、立花。落ち着け。別に不埒な事をするわけでは無いのだ。」

「誰もそんなこと言ってませんよ。」

暗に言ってるんだよなあ…。これは、無理ですかね。響ちゃんの鉄拳は、今の俺には致命傷だ。最悪死ぬ。

「何でそんな嘘吐くんですか私に言えないことなんですかだつたらもう許せないかなあ私殺しちゃうかも。」

息継ぎしてください。まずい、パニックになってきた。…落ち着け。響ちゃんは本当はいい子なんだ。何らかのアレが原因でこうなっただけのはずだ。

「…ん？」

「…なんですか。」

「いや、え？…あれ何？」

「……？」

後ろを向いた。——今です翼さんッ！

「——ATEMIッ！」

「…うッ！」

ばたりと倒れる響ちゃん。…よかった。単純な子で。そしてナイスコンビネーション。翼さん。

「…流石藤堯さん。参謀だけありますね。」

「…参謀ではないんだけどなあ。」

そして、やっとドアの前に立つ。…いやあ、ここで開けたら『実は影が薄い藤堯さんの為に作ったドッキリでした！』的なオチなら俺的に満足。

開けるとそこには——

「「おかえりなさい！」」

」

——全員集合してた。各々が、俺を取り囲むように立っている。…  
そして、後ろの翼さんは——

「——これでもう、逃げられませんね。」

「こ、この裏切り者オオオツ！」

◇?◇

「クリスマス先輩。」

「…今度はなんだよ。」

「風邪が治ったら、皆でパーティーでもしませんか？」

いつになくマジトーンな切歌に、少し動揺するクリスマス。しかし、  
パーティーか。

「…パーティーねえ。何を祝うパーティーなんだよ？」

「それはデスね…。……………。その時に考えるデースツ！」

無計画かよ。だが、その底抜けの行動力も、可愛い後輩のいい所だ。

「…はは、そうかよ。」

「司令サンは快くOKでしたよツ！よかったデスねクリスマス先輩？」

顔が熱くなるのを感じる。今熱を測れば40度は超えているだろう。  
う。

「…お、おま、お前ツ！」

「…緒川さんも、友里さんも誘ったデースツ！」

職員まで巻き込むのかよ。…まあ、偶には許してくれるだろう。…



「別に貴方は悪いことをした訳ではないでしょう？なら、謝る必要なんか無いわ。」

「——えー、皆さん。…大変長らくお待■■■■した。『■持ち帰り■時間』です。」

司令の声。どこか楽しそうだ。——何が楽しい。

「…えーと、■■■■る”7人”で、適当■■『分けてしまつて』ください」

緒川さんの声。

「わーいッ！未来！どこ■■■■帰るッ!？」

「…うーん。■■■■ころだね。…でも、■■■■は取り合いになるんじゃない■■■■?」  
やめろ。

「調■■■■になるだろうし、2人で分けましょう?」  
「…そうだね。分け合うのは良いことだよ。」  
やめてくれ。

「じゃあ、■■■■——この人に■■■■貰いましょうか。彼も■■■■と思うでしょう。」

その顔で、その声で、そんなことを言わないでくれ。

——錆びたノコギリ。

そして、ソレを持ちながら涙を浮かべ、恐怖に震えている——

「——いや、■■■■て皆ッ!…こんなのに■■■■るッ!」

——全員に背中を押され、震える手でノコギリを握りしめる人物。



その顔を見た時、勝手に涙が溢れ出た。

痛みや、悲しみを超えた何かを感じると、自分が泣いていることにすら気付けない。

「——なーに言ってる■■■■すか。小夜ちゃんの時は■■■なに手際よく■■■たくせに——」

神という奴がいるのなら、俺はそいつを、後先短い一生を、恨むことに使うだろう。——それ程の所業をしたのだ。

「…友、里——さん…？」

「…ごめ■■■…■■■…■■■…■■■…ツ！」

——私が、■■■ぼつかりに…ツ！」

振り下ろされるノコギリは、俺の折れた腕を捉えた。  
声にならない悲鳴が、部屋に響く。

何故そんなに、嬉しそうな顔をしている。何がおかしい。狂つてる。俺の事などどうでもいいが

——彼女が苦しんでいるのは、どういう了見だ。

「——あ…■■■…ツ！…■■■…■■■——す…■■■…ツ！」

「…■■■なさい…ツ！…■■■…■■■…■■■…ツ！…うう、ああああ…ツ！」

続いて左腕。…きつと、この人は順番も指定されたのだろう。この人が、わざわざ俺を苦しめるような事をする筈無いから。

「——い■■■…ツ!? ああ、あッ！」

「——ヒイッ！」

友里さんも、声にならない悲鳴をあげる。そして、尻もちを着く。精神が限界を迎えたのだろう。——しかし、悪魔共は、それに優しく手を“添える”。

「ほら、あと5回よ。■■■■なさい、■■■■。」

「……■■■■。……もうやだよオ……ッ！誰か彼を助けてよオッ！」

「……もう。往生際が悪いなあ。……手伝ってあげますから、■■■■ま  
しよっ。」

そう言つて、血塗れのノコギリを皆で持ち上げ――

「やだ――」

――そこからは、覚えていない。

ふじマリはいいぞ

目覚めたら、汗だくだった。…夢オチかよ。助かったけど――

「――おはようございます。藤堯さん。」

「――ウワアアアアッ!？」

目の前に緒川さんが居た。滅茶苦茶びつくりした。…もうこの人に目を合わせられない。怖すぎる。

「…だ、大丈夫ですか？酷く魘されていましたけど…。もしかして、小夜さんの夢でも見ましたか？」

…さっきの夢が正夢として、ここがリスポーン地点か。何が正解なのかわからないけど、取り敢えず迂闊な行動は避けよう。

ゲーム脳のおかげで、こういう展開には慣れっこだ。…いや、今もさっきのこと思い出したら寒気するけど。

「…あ、…大丈夫です…。」

「…喋り方が切歌さんみたいになってますよ。…本当に大丈夫には見えませんが。」

今のところ、黒いのは出てない。…さっきのはもしかしたら本当に夢で、何事もなく仕事に戻れるかもしれない。

…えっと、この時は何をしようとしたんだっけな。

「ところで藤堯さん。友里さんを探さなくて結構なんですか？」

思い出した。

◇？

走る走る。俺ーたーち。…古いな。うん。

そして曲がり角に差し掛かり――

「――バックステツポッ!」

「!？」

華麗に着地すると、調ちゃんもキョトンとしていた。いや、そりやそうなるわな。…いやしかし、この子は意外と危険だ。気を付けなければ。

——というか、今のは迂闊な行動にカウントされないよね？

「ど、どうしたの？」

「…悪いけど、先を急いでるから。」

厄介ごととはとにかくスルー。ドラクエでもレベル上げサボって、ボスで詰んだら漸くレベル上げしだすこの俺に隙は無かった。

——死んでからじゃ遅いんだよなあ。つーかここまで夢通りなんですか？

「…ま、待つてー…まだ小夜が来てな——あッ！」

「…聞かなかったことにするから、それじゃ。」

やっぱりおびき寄せてたのかよ。…卑怯だな。流石幼女卑怯。

再び走り出し、前には無かった2つ目の曲がり角に差し掛かる。――

――豊満なボデーが顔面に激突する。

「…何をそんなに急いでいるのかしら？ 藤堯。…その目は飾りなの？」

「…お、おうふ…マリアさん…。」

忘れてた。調ちゃんイベント回避の喜びですっかり忘れてた。てか柔らかかつ。

「…それより、…その。これ作ったんだけど、食べてくれないかしら？

あ、要らないならいいから、ええ。全然気にしないから。」

渡されたのは小包。ほのかに芳しい、そして油っこい香りが、鼻に流れ込む。…この匂いは――

「――唐揚げですか？…焦げ臭さもないし、マリアさん料理上手いんですね。」

「…え、どうしてそれが…って、失礼じゃないかしら。それ。」

ジト目で睨んでくるマリアさん。不覚にも可愛いと思ってしまうた。…だが、油断はしない。迂闊な行動は既に行っているが、重ねなければ問題ない（暴論）

「あ、すみません。…俺料理とかよくするんで、調味料とか食材の匂いはよく分かるんですよ。」

休みの日はゲームか料理しかしない男なので、漸くその真価が発揮されて、誇らしげに話してしまう。それを聞いて、マリアさんは関心していた。

「…へえ、意外と家庭的なのね。…今度私にも教えてくれないかしら？」

…今度。この言葉は死ぬほど聞いた。…死んだけど。というか、よくよく考えればマリアさんがあのヤンデレ集団の中で1番マトモだったな。…あの状況で唐揚げを口に突っ込むのは流石にイカれるとは思ったが。

…あ、もしかしてアレって、この唐揚げ？やだ萌える。感動の再開だよ唐揚げくん。

「…良いですよ。開けてもいいですか？」

「…ど、どうぞ自由に。」

頬を染めながら、指を弄るマリアさん。口ではこう言っているが、不安もあるだろう。が、女心など全く分からんし、わかる気も無い。

「…お、おお。」

見た目は普通の唐揚げ弁当。正方形に盛られたお米には、小さい梅干しが。そして、あの緑のギザギザに囲まれた唐揚げ。

「…あ、箸が無かったわね。…これ使いなさい。」

「…え、でも両手塞がってて…」

この弁当箱。二段弁当だった。…見事に両手が塞がり、箸すら持てない。

「…し、仕方にやいわね。私が食べさせてあげるわ。」

…あれ、マリアさんってこんな可愛かったっけ？ピンクの短い箸を拙く使い、唐揚げをプルプル震えながら持ち上げる。

「…あ、あーん…？」

「…あ。」

アカンやつや。これあかんやつや。俺はバカか。何で似たような

事を繰り返すんだ。

…いや、男なら最後まで見届けろ。この恥じらいに満ちたトツプアーティストの姿を。この目で――

「…美味しいです。」

「…!!そ、そうッ!?!なら、もう1つ…。」

そんなウキウキでされたら断れるわけないやろ。何で俺エセ関西弁なんや。

2つ目を頬張つても、小夜ちゃんは現れなかった。

…これは、歴史が変わったのか…?

## 覚醒

「……、……は……？」

歴史が変わる？そんな簡単に変わったら苦労しないよ。

…前と同じで、手錠をされていた。

「……よくもまあ、あんなことされた後にイチャイチャ出来ますねこのクソタラシ。」

案の定小夜ちゃんが後ろから話しかけてくる。…ん？今なんて言った？

「…あんな事？」

「…覚えてますよね？調に対するあの反応。マリアに向けたあの恐怖の表情。——殺されでもしなきゃ、そんな顔出来ませんよね。」

なんと、小夜ちゃんも記憶があった。…やっぱり夢じゃなかったのか。ここで漸く自信が持てた。

「…俺は——何も守れなかった。」

——そして、途方もない虚構感に襲われる。賢者モードと言うべきか、突然冷静になるのはよくある。

「…当たり前ですよ。あんな連中に絡まれて、半日も命が無事だったのが幸運だったんですよ。」

「…でも、俺がもう少し強く出られれば——」

「——そんな事した草食動物が、肉食動物に見逃されるわけないでしょう。」

…何だろう。すごく納得した。悔しいけど。

「…兎に角、選ぶのは貴方です。…私は貴方が大好きですが、もう無理強いしたりしません。」

「…………、ありがとう。」

「何でお礼を言われなきゃいけないんですかねえ？私としては結構凶々しい事言ったつもりだったんですけど。」

恥ずかしそうにそっぽを向く姿は、年相応に見えた。

俺はこの子を誤解していた。少し、認識を改めるべきだろう。——やべーやつから、ちよつとやべーやつに。

「——変わってねえじゃねえかッ!？」

「ウエッ!？」

今日一びつくりした。この声はまさか——

「——こんな時に変なギャグ突っ込んでくんなんッ! バカなのかッ! シリアスな場面で茶化するのはあるけどこれとそれとはちよつと違うだろうがッ!」

「…く、クリス先輩。…何故ここg」

「——大体ッ! 展開が早すぎて置いてけぼりなんだよッ! ツツコミが追いつかねえじゃねえかッ! そもそも鬱展開書こうとしすぎて暴走してんじやねえかよお前ん家イツ!」

途中から怒りの矛先は変わったが、間違いなくこのツツコミキャラはクリスちゃん。…前は1度も見ていなかったけど…。

「…お、落ち着いて…。ね? クリスちゃん。」

「落ち着けるかッ! もう我慢できねえぞオラアッ! お前死んでたんだぞッ! もつと危機感覚えやがれこのボケッ!」

…状況が少し飲み込めない。…えつと、つまり? どういうこと? 何故クリスちゃんはここまでお怒りなの?

◇?

「…あれー? クリス先輩居ないんデスカー?」

暁切歌は、雪音クリス宅に居た。合鍵を持っていたので普通に開け、立派な不法侵入をしていた。

「…折角 ■■■■ が作った薬を”飲ませてあげた”のにデース…。」

独り言。いつもの彼女は独り言だろうと、表情豊かな少女だった。——が、無表情。

「…あの女。何か気づきやがったデスカ。」

まるで2期の初期切ちゃんの様な口調。そして、ベッドの傍にある置き手紙を発見し、読み上げる。



「何デスカ？これは——」

『——拝啓 切歌さんへ、えつとなんと言いますk』

「——ヴアアアアツ！」

気が狂ったように顔を赤く染め、涙目になりながらベッドを転がった。

さつきまでシリアスだった物が、辺り一面に転がる。

◇？

「——つまり、クリスちゃんにも記憶があるか？」

「…あたしは夢で見ただけ だけどな。…今も熱で頭が痛てえよ。」

よく見ればクリスちゃんはパジャマに赤い上着、額に冷えピタを着けている。…そして、急いで来たのだろう。服が…汗で濡れてて…その、だらしなかった。

「…ど、どこ見てんだこの童貞。」

「…何で皆俺が童貞だって知ってるの。…み、見られたくないならさっさと隠しなよ。」

そう言われて、クリスちゃんは赤い顔を更に赤くする。…なんでこんな容態で来てしまったんだ。

「…医務室——は、危険だから、何処か安全な部屋に行こう。」

「じゃあ藤堯さんの部屋ですね。」

「じゃあアンタの部屋だな。」

最初に言っておく。俺も泣くぞ。屈辱すぎるわ。

仮のマイルームに着くと、少しだけ、ほんの少しだけ危惧していた事が的中する。

「…荒らされてる…。衣類が何一つ残ってねえ…。」

「…こりゃひでえな。」

クリスちゃんはそう言いながら、小夜ちゃんを見る。小夜ちゃんは目を逸らしながら、話をすり替える。

「そ、それより、どうやって過ごすんですか？友里さんも探さないと行けないし。」

「それもそうだな。…第一、見つけられなかったんだろ？どっかに監禁されてるのが、オ…チ——」

——フラリと倒れ込むクリスちゃん。急いで支える俺。あまりの体格の小ささに、少し面食らう。ちっちゃ。…でも大きいですね。

「もう1回死ねばいいのに。」

「…心読むのやめてくれない？」

いやその、ごめんなさい。

## 黄鬼

視界が回る。足が覚束無い。

あたしは、どうなった？

次の瞬間、背中に温もりを感じた。なんだろう、すごく安心する。

「——いいのに。」

「——くれない？」

何か話しているけど、意識が薄れているせいか、殆ど聞こえなかった。

もう少しだけ、この温もりに委ねてしまってもいいだろうか。病にかかる人は弱くなる。心も体も。だからという訳では無いけど、ちよつとだけ。ちよつとだけ——

◇？

「——はッ！あたしは何をやってるデスカッ！」

小一時間悶絶していた切歌。そして、やっと置き手紙を読む決心をする。冒頭は飛ばし——

『——これから映画を見に行くので、探さないでください。』以上。

「——嘘吐けデスッ！」

この1時間はなんだったのか。

◇？

「これは、…寝ちゃってますね。」

「…マジすか。…疲れてたんだね…。」

まさか立ちながら寝るとは。普通は落ち着いてからじゃないと、寝られないものなんだが、よっぽど寝つきがいいんだなこの子。

「藤堯さん。…取り敢えずベッドに運びましょう。風邪をナメてたら最悪死に至りますよ。」

「…わかった。」

俺は風邪以下か。実際そうだけど。

小夜ちゃんにタオルで汗を拭いてもらい、俺は冷蔵庫にある賞味期限がギリギリセーフの物を選ぶ。

「——ちくわしか持つてねえ!」

「…藤堯さん殆どここ使いませんからね。徹夜か自宅かで。」

ここを使った時と言ったら、精々俺の住んでるマンションの、隣の部屋がガス爆発した時ぐらいだ。…まあ、先月なんだけど。

「…というか小夜ちゃん。俺の事知りすぎでしょ。人権って知ってる?」

「そりやずつと見てれば分かりますよ。私に貴方のプライバシーで知らないことなんてありませんよ。…例えば先週に誰でヌ」

「それ以上いけない。」

初めて中学生にマジギレした。

すると——

「…あ。」

「ひッ!?!」

何故ここに響ちゃんが。やばい前世の記憶ががが。変な汗出てきた…。

「…そんなに怯えなくてもいいじゃん。部屋間違っちゃっただけだから。」

「…あれ?もしかして——平行世界の?」

小夜ちゃんが言うと、その響ちゃんはコクリと頷く。…何故?

「…というわけで、こっちの私に呼ばれた。」

「パーティねえ…。何を祝うとか、聞いてないの？」

「というか、ギャラルホルンがただのタクシー。いや、ちよつと遠出するから飛行機かな。飛ぶらしいし。」

「…いや、『その時になつたら考える』って。」

「…無計画か。でも、今はあんまりウロウロしない方がいいかもしれない。」

目を逸らしながらそう言うと、首を可愛らしく傾げる。尚、表情は『は?』みたいな感じだが。

「…何で?」

「…話すと長くなるけど、聞く?」

念を押すと、心底イラついている様子を見せ

「…いいから話しなよ。何で私がここの人のパーティに呼ばれたのか、わからないんだから。」

…よく分かってないのに来ちやうグレ響ちゃん可愛い。

「…それは、まあ。うん。オツカレサマ。」

「絶対信じてないでしょ。…気持ちは分かるけど。」

寝ているクリスちゃんを横に、必死に2人で説明する。が、流石にファンタジーが過ぎるのか、殆ど信じてもらえてないみたいだ。

「…信じられるわけじゃないじゃん。…あの人達がそんな事する訳ない。」

「…じゃあ私はもう行くから。」

「…あ、待って——」

止めても時すでに遅しだった。響ちゃん…紛らわしいか。響さんがドアを開く。

「——見つけたあ。」

「……………」

無言で閉めた。更に、凄まじい速度で鍵を閉める。ガタガタ音を鳴

らすドア。『あれー?』『どうしたのー?』とか言ってる。それを、遠い目で見つめながら、響さんはこういった。

「…ごめん。」

「…謝らないで。」

ちよつと泣いてた。

◇??

「…コイツどうするの?」

ドアを指さす響さん。その向こうには、さつきと同様響ちゃんが居るのだろう。

「強行突破は?」

「…なるべく穏便にお願いします。」

4人に勝てるわけないだろ。と言いたいところだが、相手は7人もつと勝てない。数の暴力は恐ろしい。というか、クリスちゃんを頭数に入れる訳にはいかない。

「…あのさ、こっちの私って——バカだよな?」

「あ、うん。そうだね。」

何せあだ名が『あのバカ』だからなあ。俺は呼んでないけど。それクリスちゃんしか言わないけど。巷ではビツキーと呼ばれて…って、どうでもいいか。

「割と即答ですね。」

「…情報はなるべく渡しとかないと。」

暴論とも言える言い草で、小夜ちゃんを言いくるめる。

「…なら、アレが使えるんじゃないの?ほら——」

「——!?さ、流石にそれは馬鹿にしすぎでは…?」

なんと言う、間抜けな作戦だ。というか、平行世界の自分が引つかかると思っただけでいい出したのだろうか。悲しすぎる。

それ以外策が無いわけではないが、どれも博打になる。だったら、折角考えてくれた案を採用すべきか…?

「…やってみよう、か?」

「……いや、ごめん。自信なくなってきた。」  
それは自分に対する作戦だからとかいう高度なギャグ  
……いや、やっぱ何でもない。

## 唐突な自分語りは基本

——夢があった訳では無い。やりたい事があったわけでもない。

その内、ここの職員になった。どうしてこうなったのか、全く分からない。だけど、翼さんや奏さんのサポートを、全うしたいと思った。

——スケジュールが厳しい仕事に、俺が音をあげたのは、そんなに遅くはなかった。適度にサボり、適当にこなした。だけど、文句は言われなかった。当たり前だ、仕事はしていたのだから。

——熱意が足りなかった。思いが足りなかった。

奏さんが死んでから、そう思うようになった。俺がもつと頑張っていれば。もつと、何か出来ていたら。そんな1ミリのイメージも湧かない事を言っていた。

『馬鹿じゃないの?』

平手打ちを食らった。何が起きたのか、分からなかった。

『あなたが、あなただけが頑張っても仕方ないじゃない。私だって、何も出来なかったのに。』

そんなことを言った。それでも捻くれた俺は、その慰めを素直に受け取らなかつた。

『じゃあ何か?俺は何も悪くないと?ただ給料を食うだけの無能が、何も悪くないと?』

思い出したくも無いけど、そう言った気がする。怒りのままに、哀しみのままに。

でも、怒りも、哀しみも、彼女には勝てなかつた。

『ふざけてんじゃないわよ、このへなちよこ青二才が。あんまり調子に乗っていると、本当に奏さんに顔向けできなくなるわよ。』

今度はまさかのグープン。涙目になったのは、最早不可抗力だ。

へなちよこ青二才という語彙に、今では乾いた笑いが出る。けど、



救われたのは覚えてる。

俺は自分に自惚れていたのかもしれない。いや、してたんだろう。周りの奴らを全部下に見てしまうこのイカれた目を、覚まさせてくれた恩人。

だから、絶対助けたい。今度は俺が――

◇?◇

「――惚気話ですか。」

「…うるさい。」

「語りがくどい。」

「…さーせん。」

元はと言えば、話せ話せとしつこいこの子達が悪いのに。何故俺はここまで責められているのだろう。もうやめて！もう俺の体はボドボドだ！

「私んこの藤堯さんはどうなんだろう。いつも一緒に居るけど。」

「どの世界でも一緒とか…。運命ですか（笑）」

何笑ってたんだ。すごく恥ずかしくなってきた。もう死のうかな。

「…あ、クリス先輩。起きてたんですね。」

「…ツ!？」

ビクリと跳ねる肩。ちよつとー？

「…本当に起きてたんですか…。いやらしい…。」

「…ん、んツ！ あ、あたしはその…何も聞いてねえからなツ！」

顔真っ赤で否定しても、何もならないだろうに。…まあ、いつか。この人らなら。

――つて、あれ？

「許さない開けろ早く開けろ殺してやる許さない開けろ――」

…許して☆

「許さないって言ってるでしょ。…さっさと作戦を実行しよう。手遅れになる前に。」

「…え？この状況で？」

いや無理だろ。うん、絶対無理無理。もう手遅れとかそういう次元ではない。

俺の疑問を無視し、決行する響さん。…責任、取れないからねっ。

「——早く開け…えっ。」

「…そーら。」

突然開いたドアに驚き、目を見開く響ちゃん。そして見逃さずにあれを放り投げた。

「…こ、これは？——うげっ!？」

「——ちくわだアアッ！」

響さん怖いです。後ろ向いた隙にロングスリーパーはちよつと引きますよ。

「…ちよ、ギブツ！ギブツ！」

「…大丈夫。死にはしないから。」

「死ぬからーッ！——助けて、藤堯さんッ！」

何故俺。…俺がどうこうできるわけないだろ！いい加減にしろ！

…でも、ちよつとやりすぎじゃないか？確かに酷いことされたけども。憎しみが絶頂に達した事もあったけども。

「…響さん。少しだけ、緩めてあげてください。聞きたいことがあるんです。」

「…う…いいけど、もう虫の息だよ？」

ダメかも知れない。けど、ワンチャン残ってるからセーフ。

「…ぶッ…はあ、はあ…ッ！し、死ぬかと思った…。」

「…響ちゃん。友里さんの居場所は知ってるかな。」

思ったより声が低く出る。そしたら、響ちゃんの顔が——恐怖に塗り変えられた。

「…ご、ごめんなさいッ！ごめんなさいッ！許してくださいッ！何でもありますからッ！だから嫌わないで下さいッ！」

「…え、ええ…？」

こんな表情をされて、『ん？今何でも（ry）なんて言えるわけがない。軽く恐怖を覚えていると、小夜ちゃんがコソつと囁いた。

「…アレですよ。ヤンデレ系の女の子は拒否されるのを嫌うんです。聞こえないふりをしたり、発狂したり。…響さんは後者ですね。」

前者がタチ悪すぎて笑う。と考えると、響ちゃんはまだマシな方なのか（戦慄）。

「…なら、俺はどうすべきなの？」

「…無理強いはしませんが、厳しく断ると自殺とかしかねないので、それはやめといた方がいいかと。」

すごいなこの子。まるでヤンデレ博士だ。…自分がそうだとここまで詳しくなれるもんなんすねえ。——そして思い出す。この状況を動けない体で見えていた者がいた事を。

「……。」

ドン引きである。…クリスちゃん？君ももしかしたら同じ状況になつてたかもしれないだよ？…あ、だからか。成程。

「…じゃあ響ちゃん。質問を変えるけど——その気持ちは、何時から？」

勘違いだつたら恥ずかしいことこの上ないが、前世の事を考えるとそうとしか考えられない。

何らかの因子がアレして、こんな惨劇を起こしたのは確定的に明らか。ひぐらしと言う名アニメを知らないのかよ。

「…そ、それは…。…小夜ちゃんと、切歌ちゃんと共闘した時に——をした時、です。」

怯えながら、恐る恐る言葉を零す響ちゃん。それを聞いて、ハツとする響さん。…俺も察したけど、違つたら怖いし黙つとこ。

「…じゃ、じゃあ——」

——私のせいってこと…？？」

仲間が増えるよ！やったねさくちちゃん！

「——ふう。…あー…。」

——ディスプレイに目をやられたツ！ぐわーっ！喰らえブルーライトカットツ！相手は死ぬ！…はあ。」

ひとり遊びをしていた、仕事終わりの夜。深夜テンションなので何をしでかすか分からない俺。

「——。」

何処からか感じる、舐めるような視線。こんな深夜に、一体何者が。

「——誰ツ!?!」

この時は、どうせ小夜ちゃんとか小夜ちゃんとかその辺だろうと高を括っていた。すると、逃げるような足音が。

恐る恐る見ていた者が居た場所に向かい、ある物を見つけた。

「——青い、髪?」

◇??

「——S2CAによって、その…：やんでれ、というのが感染したと?」

「…本人が言うにはね。」

「…本当なんですよ！今だって襲いたいくらい愛おしいですツ！」

すごく真面目な顔でエルフナインちゃんに言われ、俺は渋々と言ったら感じで答える。響ちゃんが何か言ってるが聞こえない。

ゆっくりバレないように、何とか歩みを進め、漸くエルフナインちゃんが居る研究室に着いた。…登山した時並に疲れた。

「…では、ギアを纏って確かめてみましょう。心象に直接影響が出ているのならば、変化が出来ているかもしれない。」

「…そ、そうだね。…って、何か手早くない？今考えたにしては…。」

「…実は、この事態には既に気付いていました。当然あなたが苦しん

でいた事も。」

衝撃の真実うゝ…。こんな天使みたいな子が、まさかそんな。まあ、別にいいか。

うん。あ、どうでもいいって事じゃなくて——

「——何で、知ってて何もしなかったんだ…ッ！」

「……。」

「…知ってたって事はつまり？この状況を楽しんでたって言うこと？」

…ぶつちやけると、限界だった。助けて欲しいと、何度も叫んだ。だけど誰も助けてくれなかった。

こうやってエルフナインちゃんに八つ当たりするくらいには。

「…やめなよ。この子に当たっても何にもならない——」

「——君に何がわかるんだッ！今来たばかりの君がッ！俺の気持ちの何がわかるんだッ！」

…こうやって、響さんに八つ当たりするくらいには。

…後で恥ずかしさと申し訳なさで悶絶するから聞いてやって。

「この子にストーキングされてッ！暴力振るわれてッ！マリアさんや調ちゃんに恥かかされてッ！」

緒川さんに襲われて…ッ！…司令にも襲われて……。

…翼さんにも、裏切られて…、

友里さんに…哀しい顔させて…。」

「…藤堯さん…。」

何で俺はこんなキレてんだろうか。ここまで馬鹿だとは、自分でも思わなかったけど。…何泣いてんだよ。男だろ。

そんなバカを、優しく撫でてくれる人が居るのがここだ。

「…辛いなら、最初から言いやがれ。迷惑だと思ってるなら、お門違いだからな。」

「…クリスマスちゃん…？」

照れたようなしなめつ面で、俺を撫でてくれる。…やっぱ天使かよこの子。

「…ごめんなさい。私、気持ちを抑えきれなくて…。迷惑かけて、すみ

ませんでしたッ！」

「…響ちゃん。」

悲しい顔をして、謝罪する。その目には、黒い物は無かった。…露骨な好意はやめてくれないけど。

「…あー、この空気で言うのはなんですけど、私は諦めませんからね？前にも言ったでしょ？大好きだって。」

「…小夜ちゃん。」

いつもの調子で、告白される。…いや、ストーキングはやめて欲しいけども。

「…ボクは、この事態を実験のように見てきました。…ですが、今、目が覚めました。…ボクがこんな悪魔のような事をしていた事に、気付きました。」

…皆さんが元に戻るように、ボクにも出来る限りのサポートをさせてください…ッ！」

「…エルフナインちゃん。」

エルフナインちゃん。ごめん、実は黒幕なのかとめっちゃ疑ってた。本当にごめん。あと八つ当たりしてごめん。

——希望の光が、一筋見えた。まだか細いその光は、彼にとって眩い光だった。

だが、彼にとつての地獄は、まだまだ終わらないだろう。例え見る人によっては、ハーレムに見える状況でも……………。

…何この最終回っぽいモノログ。すごく不穏なんだけど。

◇？

「——デースッ！舐めやがってデースッ!!デスデスデースッ！」

人の家で激昂する少女。暁切歌。セリフに似合わず、怒り狂う様は

まさに鬼。布団を引きちぎり、綺麗な自らの金髪を掻きむしる。――  
顔真つ赤涙目だけど。

「…はあ…ッ！ はあ…ッ！ ぜ、絶対に許さない…ッ！――よくも  
あたしの黒歴史を―ッ！」

黒歴史上等とは一体。

――彼女の地獄も続く。

◇？

「――成程、やはり適合系数が跳ね上がっていますね。」

「…いつもの倍はあるぞこれ…。黄金鍊成した時より強くない？」

「おお！力がみなぎるッ！魂が燃えるッ！私――」

「――いや、君のマグマは迸らなくてもいいから。」

響ちゃんにギアを纏って貰ったら、案の定これである。クローズマ  
グマになりたての万丈みたいな、そんな高揚感を感じているのはわ  
かった。

「…この流れで、他の人達も強くなっていけば――間違はなく未来さ  
んに蹂躪されるでしょうね。」

「…最凶の装者…シャレにならんでしょこれは。」

確かにこれは、味方をいくら増やしてもビームで一掃されて終わる  
のがオチだろう。

「――ですが、響さんが正気を取り戻した時と同じ方法なら、未来さん  
を味方につけられるかもしれませぬ。」

「…マジすか。」

【朗報】ラスボス、仲間になる説浮上。

「…どうやってしたか覚えてんのか？」

「…えっと、確か——」

『——ごめんなさいッ!ごめんなさいッ!!』

悲嘆する響ちゃん。…これを未来ちゃんにするのか…。嫌だなあ…。どうやるのか今一わかんないし。

「…あの人にはアンチリンカーも使えません。…司令<sup>人</sup>も緒川<sup>外</sup>さん<sup>も</sup>居ますし…いや、でも…。」

…もうこれは、エルフナインちゃんに任せっきりにするしかないな。過労死しないか心配だけど。

「…取り敢えず、あいつ慰めてやれよ。」

「…あ。」

指さされた方向を見ると、体操座りで俺を睨む響さんが。

…許してつかあさい…。